

八田村文化財調査報告書 第7集

Yamanashiken Nakakomagun Hattamura

山梨県中巨摩郡八田村

Mujina Murakita

六科・村北遺跡

宅地分譲住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2003

八田村教育委員会

中央都市建設株式会社

Yamanashiken Nakakomagun Hattamura

山梨県中巨摩郡八田村

Mujina Murakita

六科・村北遺跡

宅地分譲住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2003

八田村教育委員会

中央都市建設株式会社

序 文

本書は、八田村六科に計画された宅地分譲住宅建設工事に伴い、八田村教育委員会が平成13年度に発掘調査した六科・村北遺跡の報告書です。

六科・村北遺跡は現在の六科集落の北東端に位置しています。遺跡の南側を東西に走る県道竜王芦安線は、かつて御勤使川の流路となっていました。その流路を地元では「前御勤使川」と呼んでおり、この前御勤使川の左岸に遺跡は立地していたとも言えます。

発掘調査の結果、正確な時期は確定できませんが、中世頃と推測される柱穴列や多くの土坑、竪穴式遺構、墓壙が発見されました。六科地区でこれまで本格調査の例はなく、遺構が確認されたのは今回の調査が初めてです。こうした意味からも調査結果は郷土の歴史に新たな光をあてる貴重な新資料と言えます。

本書が八田村のみならず山梨県の歴史を解明する一助となり、広く利用され文化財の保護、普及に役立つことを願ってやみません。

末筆ではありますが、調査から報告書作成まで、御指導御協力を賜りました関係諸機関および関係者の方々に厚く御礼申し上げます。

平成15年3月

八田村教育委員会

教育長 内田一雄

例　　言

1. 本書は、山梨県中巨摩郡八田村六科に所在する六科・村北遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、八田村六科 76 番地他における宅地分譲住宅建設工事に伴い八田村教育委員会が実施した。
3. 遺跡の名称は、遺跡の所在する大字名(六科)と小字名(村北)を組み合わせて六科・村北遺跡とした。
4. 発掘調査期間は、平成 13 年 2 月 19 日～平成 13 年 2 月 27 日までである。
5. 本書の執筆は斎藤秀樹(八田村教育委員会)が担当し、写真撮影は吉田晃章、斎藤が行った。
6. 編集は小林素子、斎藤が担当した。
7. 図版のトレースおよび版組は、江川晶子、大久保久美、小林、桜井理恵、穂坂美佐子、吉田が行った。
8. 発掘調査から報告書作成まで、次の諸氏、諸機関にご教示、ご協力を賜った。記して感謝の意としたい。(敬称略・五十音順)
今福利恵、畠 大介、村松佳幸、室伏 徹、森原明廣、米田明訓
帝京大学山梨文化財研究所、山梨県教育委員会学術文化財課、山梨県埋蔵文化財センター
9. 本報告書にかかる出土品および記録図面、写真等は八田村教育委員会に保管してある。

凡　　例

1. 遺跡及び遺物の実測図の縮尺は、それぞれ図に明記しているが、原則として以下のとおりである。

(1) 遺構	墓壙	1/40
	窓穴状遺構	1/40
	掘立柱建物	1/60
	柱穴列	1/60
	土坑	1/60
(2) 遺物	鉄製品	1/2

2. 遺構断面図、土層図における数値表示は標高を表す。
3. 掘図中の遺物番号、写真図版の遺物番号はすべて一致している。

目 次

序 文

例 言

凡 例

目 次

第Ⅰ章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯と経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査の経過	1
(3) 調査組織	1
第2節 調査の方法	1
(1) 調査方法	1
(2) 基本層序	2
第Ⅱ章 地理・歴史環境	4
第1節 地理環境	4
(1) 八田村の地形	4
(2) 遺跡周辺の地形	6
第2節 歴史環境	6
第Ⅲ章 発見された遺構と遺物	10
第1節 遺構の調査	10
(1) 墓壙	10
(2) 竪穴状遺構	10
(3) 掘立柱建物	10
(4) 柱穴列	12
(5) 土坑	12
第Ⅳ章 自然科学分析	18
第1節 六科・村北遺跡の出土骨片の鑑定	18
第Ⅴ章 調査の成果と課題	19
第1節 遺構について	19
(1) 墓壙	19
(2) 竪穴状遺構	19
(3) 掘立柱建物	19
(4) 柱穴列	20
第2節 まとめと課題	21
写真図版	23

挿 図 目 次

- 第 1 図 基本層序柱状図
第 2 図 六科・村北遺跡調査区域図 (1/500)
第 3 図 六科・村北遺跡全体図 (1/180)
第 4 図 八田村位置図 (1/100,000)
第 5 図 八田村地形図 (1/50,000)
第 6 図 御勅使川扇状地地形分類図 (1/50,000)
第 7 図 六科・村北遺跡および周辺の遺跡位置図 (1/7,500)
第 8 図 六科・村北遺跡と周辺の地割図 (1/3,000)
第 9 図 1号墓墳平・断面図、1号竪穴状遺構平・断面図 (1/40)
第 10 図 土坑群平面図 (1/60)
第 11 図 柱穴列断面図 (1/60)
第 12 図 土坑断面図 (1/60)
第 13 図 1号竪穴状遺構・24号土坑出土遺物 (1/2)
第 14 図 六科・村北遺跡第2地点2次調査第1トレンチ竪穴状遺構平・断面図 (1/80)
第 15 図 六科・村北遺跡第2地点2次調査第6トレンチ竪穴状遺構平・断面図 (1/80)

表 目 次

第 1 表 土坑計測表

第 2 表 土坑計測表

写真図版目次

- 写真図版 1 25 写真図版 3 27
1. 調査区全景遺構確認（東から）
 2. 調査区全景（西から）
 3. 調査区全景（東から）
 4. 柱穴列（西から）
- 写真図版 2 26
1. 40～43号土坑他（西から）
 2. 24号土坑鉄製品出土状況
 3. 1号竪穴状遺構（東から）
 4. 1号竪穴状遺構北西隅ステップ

第Ⅰ章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯と経過

(1) 調査に至る経緯

平成12年、八田村六科字村北73・75・76番地に、中央都市建設株式会社によって宅地分譲住宅建設工事が計画された。計画予定地は八田村埋蔵文化財包蔵地No.6の六科・村北遺跡に当たるため、文化財保護法第57条の2項に従って、中央都市建設株式会社から関係書類が山梨県教育委員会教育長に提出された。その結果、平成12年12月19日付で、山梨県教育委員会教育長から「試掘・確認調査」の通知がなされた。この通知をふまえ、八田村教育委員会が中央都市建設株式会社からの試掘調査の依頼を受託し、平成13年1月18～19日、試掘調査を実施した。

試掘調査ではトレーンチを2カ所設定した。道路部分は宅地部分より深く掘削が及ぶため、道路部分にあたる第2トレーンチを中心的に調査を行った。その結果、第1トレーンチから土坑1基、第2トレーンチからは多数の土坑、竪穴状遺構、墓壙を発見した。

この調査結果をもとに、中央都市建設株式会社と八山村教育委員会が協議し、道路部分について発掘調査を実施することとなった。一方、宅地部分に関しては遺跡と工事掘削深度との間に保護層が30cm以上確保されるため調査の対象外とし、両者の間で遺跡保存協定書を締結した。

(2) 調査の経過

平成13年2月19日	発掘調査開始
平成13年2月27日	発掘調査終了

(3) 調査組織

調査主体	八田村教育委員会
調査担当者	斎藤秀樹（八田村教育委員会）
調査参加者	小林素子、穂坂美佐子、保延 勇

第2節 調査の方法

(1) 調査方法

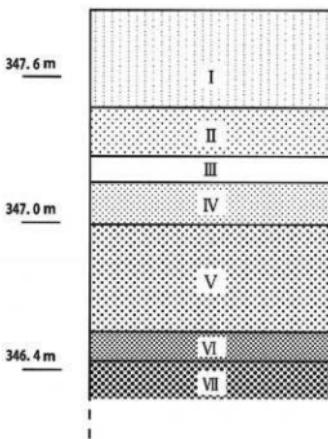
試掘調査の結果を基に、発掘調査では表土をバックホーで掘削し、その後人力で遺構確認を行った。また、調査区南東角に小さな試掘トレーンチを設定し、確認面より下の堆積状況および遺構の有無を確認しながら調査を進めた。

(2) 基本層序

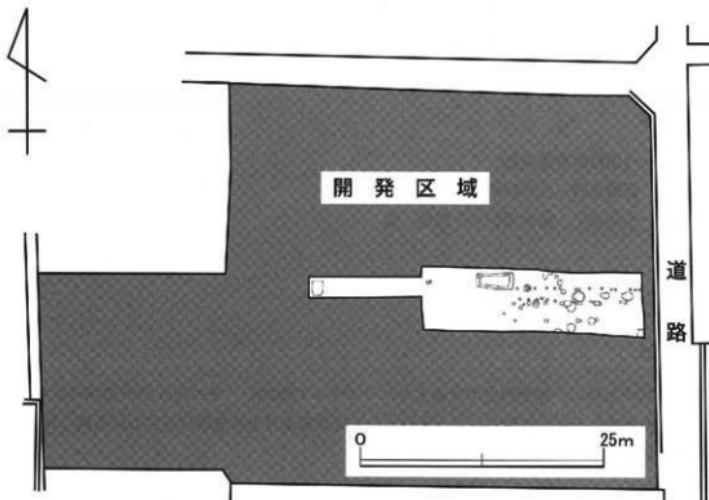
調査区はほぼ平坦な地形であり、また調査範囲も狭いため、調査区全体での基本層序はほぼ同じである。

土層説明

- I 褐色土。耕作土。
- II 褐色～暗褐色土。耕作土。
- III 暗褐色土。明黄褐色土を含む。遺物包含層。
- IV 明黄褐色土。地山。暗褐色土を少量含む。
- V 明黄褐色土。地山。暗褐色土をわずかに含む。
- VI 明黄褐色土。地山。小石を含む。
- VII 青灰色土。砂礫層。砂が主体。

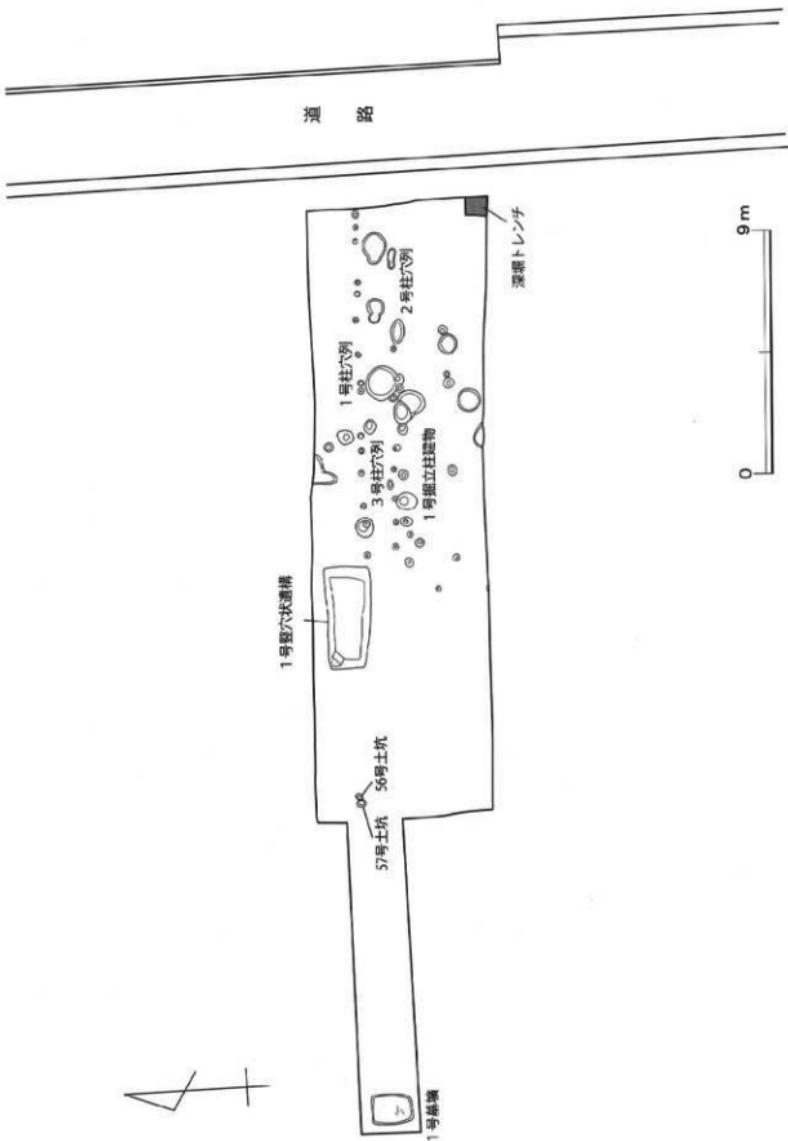


第1図 基本層序柱状図



第2図 六科・村北遺跡調査区域図 (1/500)

第3図 六科・村北遺跡全体図 (1/180)



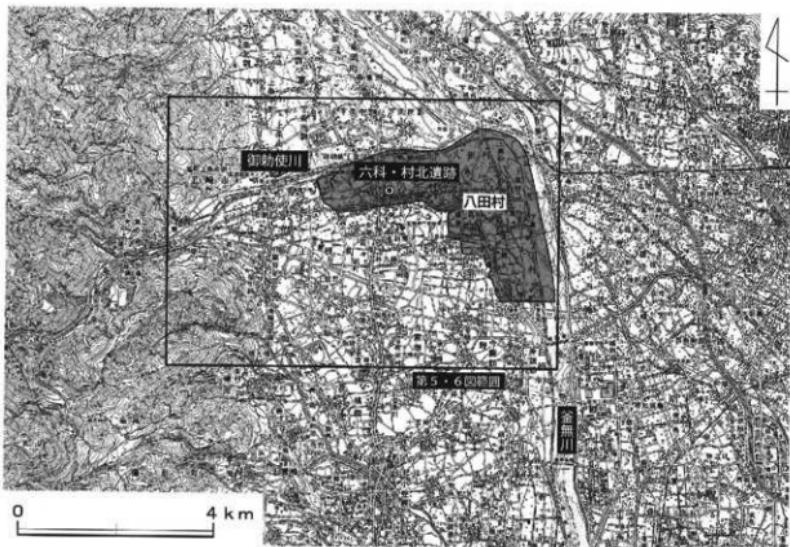
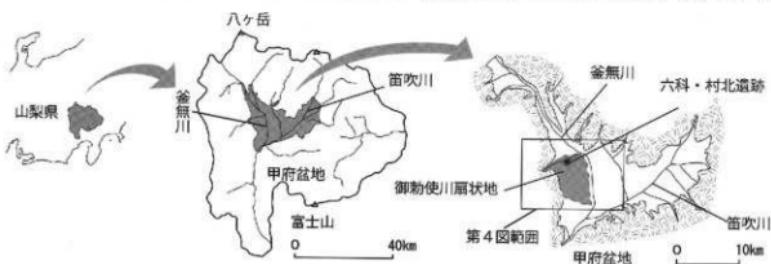
第Ⅱ章 地理・歴史環境

第1節 地理環境

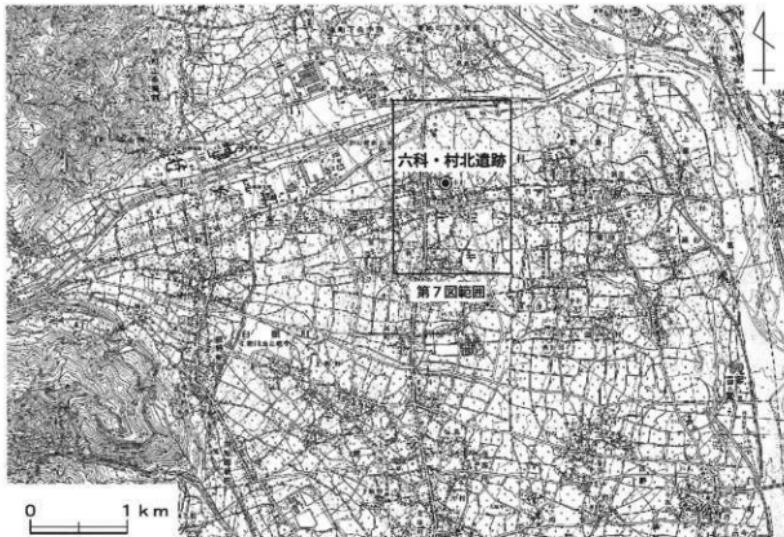
(1) 八田村の地形

八田村の地形は御勅使川によって造られた御勅使川扇状地と釜無川によって形成された沖積低地、そしてハケ岳の噴火による泥流で造られた台地の大きく三つに分かれる。

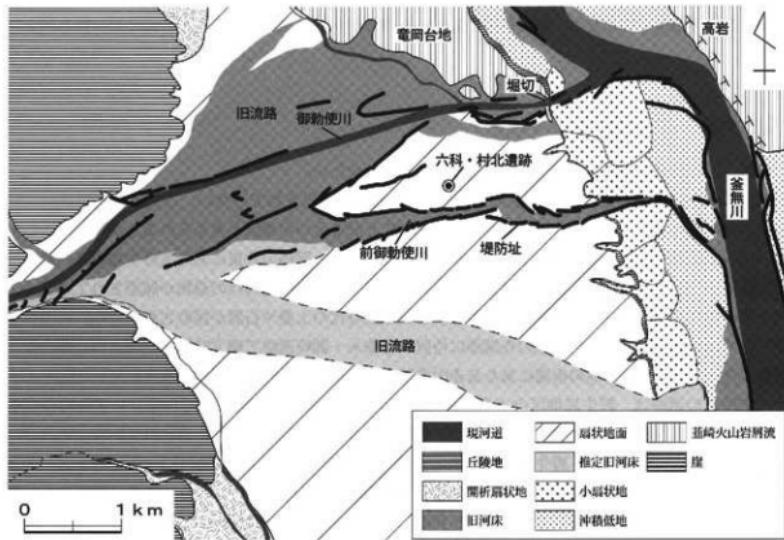
村西部は御勅使川扇状地にあたり、西から東へ傾斜する扇状地地形が広がっている。一方村東部は、村の東側を南流する釜無川によって御勅使川扇状地の扇端部が削り取られているため、北から南へゆる



第4図 八田村位置図 (1/100,000)



第5図 八田村地形図（1/50,000）



第6図 御勅使川扇状地地形分類図（1/50,000）

(高木・中山 [1987] による第8図を基に山梨県地形分類図・明治21年測量図を考慮し作成)

やかに傾斜する沖積低地となっている。扇状地と沖積低地の境には、高さ 10~20 m にもおよぶ崖が形成されており、その岸は両者を区画する境界となっている（第 6 図）。

御勅使川は大正時代に現在の流路に固定されるまで、何度も流路を変更してきた。このため旧流路やその旧支流のルート上では崖が土砂によって埋積あるいは浸食され、ゆるやかなスロープとなっている。さらに沖積低地上には供給された砂礫によって小さな扇状地が造り出されている。大正時代まで御勅使川の流路であり「前御勅使川」と呼ばれている現在の県道芦安竜王線のルート上はその一例であり、沖積低地上に小扇状地が造り出されている。そのため扇状地と沖積低地を両する崖線が見られず、扇状地から低地へとゆるやかな傾斜が続いている。こうした小扇状地は崖線にそって複数確認することができる。

御勅使川扇状地と沖積低地、小扇状地がいずれも河川の働きによって形成されたものであるのに対して、地元で「赤山」と呼ばれている小高い丘は、八ヶ岳の噴火によって流れでた、革崎火山岩屑泥流と呼ばれる泥流を起源とした台地である。赤山は革崎と八田村を繋ぐ堀切橋の南側に位置しているが、本来は革崎市に広がる竜岡台地と一続きの台地であり、竜岡台地の南端にあたる。

（2）遺跡周辺の地形

六科・村北遺跡は御勅使川扇状地の扇央部に位置している。遺跡の南約 270 m の地点には県道竜王芦安線、つまり前御勅使川が東西に走っており、遺跡は前御勅使川の左岸に立地していたともいえる。本遺跡周辺は比較的平坦な地形で、西から東へゆるやかに傾斜する扇状地の地形が続いている。遺跡から北へ約 800 m の地点から北側は、等高線が複雑化し、崖線が現れており、御勅使川の旧流路が推測できる。実際に本遺跡から北西へ約 600 m の地点に位置する六科・北新田遺跡の試掘調査結果では、東西に走る 3 本の旧流路を確認した。さらにその北側には現在の御勅使川が東流している。旧流路の視点から遺跡の場所を考えると、遺跡が立地しているのは前御勅使川と御勅使川の旧流路間の微高地上にあたる。

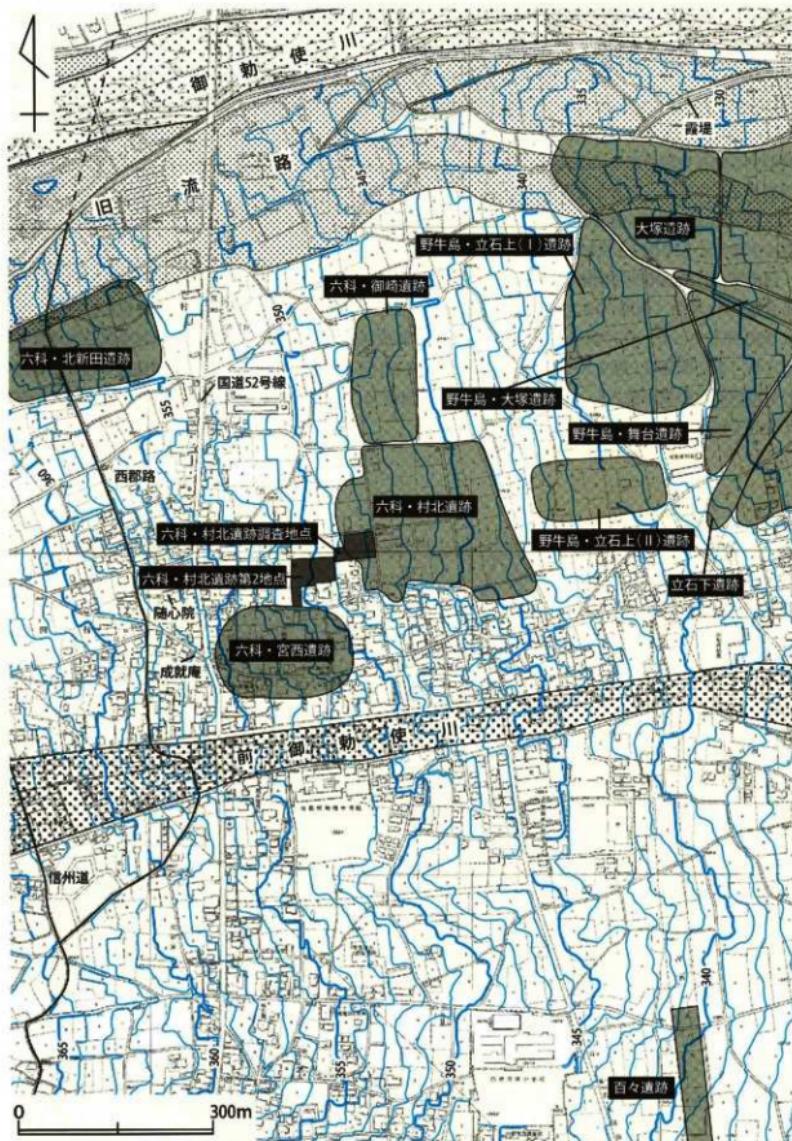
第 2 節 歴史環境

六科・村北遺跡周辺の歴史環境を時代に沿って見ていく。

遺跡の所在する六科地区では、縄文・弥生時代の遺跡は発見されていない。これは、本遺跡が六科地区で初めての本格調査であり、調査事例が少ないことがひとつの要因と考えられる。別の要因としては、扇状地扇央部という立地環境が考えられるだろう。一方、遺跡の北東にあたる野牛島地区の御勅使川扇状地上では大塚遺跡や石橋北屋敷遺跡、立石下遺跡で縄文や弥生時代の遺物が確認されている。一例を挙げれば、立石下遺跡では縄文時代晚期および弥生時代の土器や石器が採取されている。八田村全域でみてみると、御勅使川扇状地の先端部に位置する徳永・御崎遺跡で縄文時代後期堀之内式期の配石遺構が発見され、竜岡台地の南端にあたる赤山遺跡では中期の土器片や石器が採取されている。

古墳時代の遺跡は、野牛島地区の大塚遺跡で前期の住居址が 9 軒発見されている。いずれの住居も調査区中央を流れる御勅使川旧流路より北側、御勅使川右岸の尾根状微高地に造られていた。

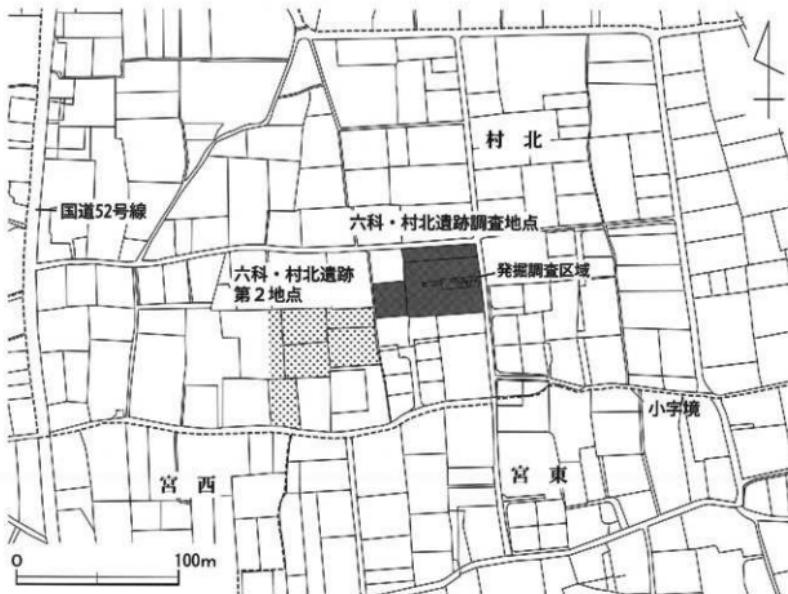
奈良・平安時代に入ると、野牛島地区で遺跡数は一気に増加する。大塚遺跡で 33 軒、野牛島・大塚遺跡 9 軒、立石下遺跡 13 軒、石橋北屋敷遺跡 13 軒の住居址が発見されており、奈良・平安時代の集落が御勅使川扇状地上に広がっていたことが判明した。古い住居で 8 世紀中頃、9 世紀の後半で一度姿を消し、その後 11 世紀の住居が 1 軒、大塚遺跡でみつかっている。



第7図 六科・村北遺跡および周辺の遺跡位置図 (1/7,500)

中世に入ると、文書記録等に六科集落についての情報が現れ始める。六科集落の初現についての具体的な経緯、年代ははっきりしていないが、伝承によれば、前御勤使川の水害を避けるため御勤使中学校東側の字「小六科」から現在の地へ移転したと言われている（八田村誌）。六科の集落が文献資料で最初に現れるのは、慶応4(1868)年に寺社の役所へ提出された成就庵（日蓮宗）の由来書である。由来書によれば、文保元(1317)年に妙心院法悦が庵を結んだのが成就庵の始まりとされている。また、六科の中心的な寺院である永富山隨心院（曹洞宗）の由来書（慶応4年）によると、文禄元(1592)年の開基とされている。双方とも江戸時代の記録のため資料的裏付けに乏しいが、六科集落の東端の道辻には中世の六地蔵石幢が置かれている点や16世紀後半の武田家印判状等の文書を考慮すると、六科集落は少なくとも中世16世紀には現在の地に存在していたと推測できる。

江戸時代、検地帳や村明細帳等の諸記録によって六科集落についての情報量は飛躍的に増加する。慶長6(1601)年の「西郡六科之郷御繩打屋敷水帳」によれば、屋敷数は14軒を数え、屋敷の合計坪数は890坪であった。江戸時代、駿河と信州を結ぶ駿信往還の一部である西郡路が六科集落の西側に整備され、また徳島堰（寛文5(1665)年起工、寛文11(1671)年完成）が開削され灌漑施設が整えられるなど集落西側に耕地が拡大し、街道沿いに集落が増加する。文化3(1806)年の屋敷帳では軒数は72軒となっている。



第8図 六科・村北遺跡と周辺の地割図 (1/3,000)

(注1) 萩野他 1968 柳本春雄家文書／新編甲州古文書 第2巻

(注2) 八田村誌編集委員会 1972

引用・参考文献

- 磯貝正義他 1995 『山梨県の地名』 平凡社
- 萩野三七彦他 1968 『新編甲州古文書』 第2巻 角川書店
- 河西 学 2000 「石橋北屋敷遺跡周辺の地形環境」『石橋北屋敷遺跡』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第178集 山梨県教育委員会他
- 経済企画庁 1973 『土地分類図一山梨県一』
- 小林健二他 2000 『石橋北屋敷遺跡』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第178集 山梨県教育委員会他
- 齊藤亨治 1998 『日本の扇状地』 古今書院
- 斎藤秀樹 1999 『村内遺跡詳細分布調査報告書』 八田村文化財調査報告書 第1集 八田村教育委員会
- 2000 『野牛島・大塚遺跡』 八田村文化財調査報告書 第2集 八田村教育委員会他
- 2001 『榎原・天神遺跡』 八田村文化財調査報告書 第3集 八田村教育委員会
- 2002 『徳永・御崎遺跡』 八田村文化財調査報告書 第4集 八田村教育委員会
- 2003 『平成13・14年度埋蔵文化財試掘報告書』 八田村文化財調査報告書 第6集 八田村教育委員会
- 白根町誌編纂委員会 1969 『白根町誌』 白根町
- 高木勇夫・中山正民 1983 『甲府盆地西部地域の地形』『日本大学文理学部自然科学研究所研究紀要』第18号
- 1987 『微地形分析よりみた甲府盆地における扇状地の形成過程』『東北地理』39
- 中巨摩郡文化協会郷土研究部 1988 『中巨摩郡地名誌』 中巨摩郡文化協会連絡協議会
- 新津 健 1997 『大塚遺跡』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第137集 山梨県教育委員会他
- 八田村誌編集委員会 1972 『八田村誌』 八田村
- 保坂康夫 1999 『御勘使川扇状地の古地形と遺跡立地—中部横断道の試掘調査の成果から—』『研究紀要』15 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 2002 『御勘使川の流路変遷にかかる最近の考古学的知見』『甲斐路』第100号
- 山梨県教育委員会 1986 『河内路・西郡路』 山梨県歴史の道調査報告書 第7集
- 米田明訓他 2001 『立石下遺跡』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第189集 山梨県教育委員会他

第Ⅲ章 発見された遺構と遺物

第1節 遺跡の調査

(1) 墓壙

1号墓壙 (第9図、写真図版3)

位置 上坑が調査区東側に集中するのに対し、他の遺構から孤立して調査区西端に位置する。

遺存 遺構上部はすでに削平されており、確認面から床面までの高さは約16cmを測る。

形状／規模 囲丸方形プランを呈す。東西軸は上端で約1.1m、下端約1m、南北軸は上端で約1.5m、下端約1.4mを数える。

床面 ほぼ平坦で、硬化面はない。

遺物 人の歯牙、大腿骨および種子が出土した。

出土状況 墓壙北側に歯牙片、草壙南側に大腿骨と推測される骨が出土した。歯牙片は周囲の土壤ごと取り上げ水洗した。その結果、歯片と種子1点を検出した。骨は非常に多く人頭骨の他はほぼ土壌化していた。残った歯や骨の位置関係、墓壙の規模などを考えると、葬られた遺体は北頭側臥西向きの屈葬だと推測される。なお、歯の詳細および歯から推定される被葬者については、第IV章自然科学分析第1節六科・村北遺跡の出土歯片の鑑定を参照していただきたい。

(2) 穫穴状遺構

1号竪穴状遺構 (第9・13図、写真図版2・3)

位置 調査区中央の北壁際。

遺存 遺存状態は比較的良好で、確認面から床面まで約40cmを測る。

形状／規模 長方形プランを呈す。東西軸は上端で約3.8m、下端約3m、南北軸は上端で約1.6m、下端約1.2mを測る。

床面 顯著な硬化面ではなく、ほぼ平坦である。

出土遺物 棒状の鉄製品が1点、遺構東側の底部付近で出土した。上下端部とも欠損している。現存での長さ20mm、幅、厚さとともに4mm、重さ1.21gである。断面は矩形を呈する。

備考 遺構北西隅に地山を掘り残してステップ状の高まりが造られている。

(3) 掘立柱建物

1号掘立柱建物 (第10・11図、第1表、写真図版1)

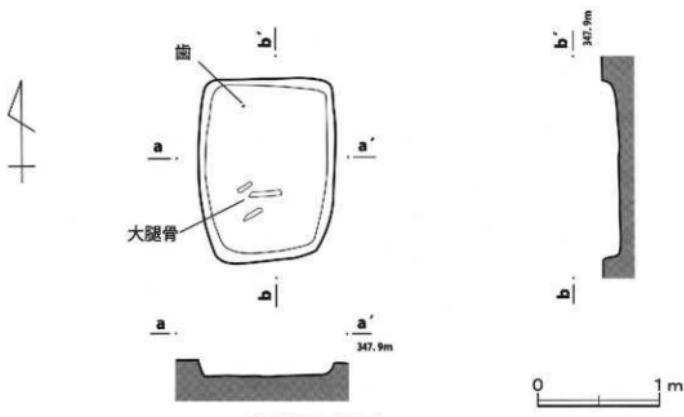
多数の土坑のなかで、掘立柱建物の可能性がある遺構を1棟検出した。遺構が調査区外の南側へ続いているため正確な形状は不明であるが、土坑の配置から本書では掘立柱建物として報告する。

位置 調査区東側に位置する。

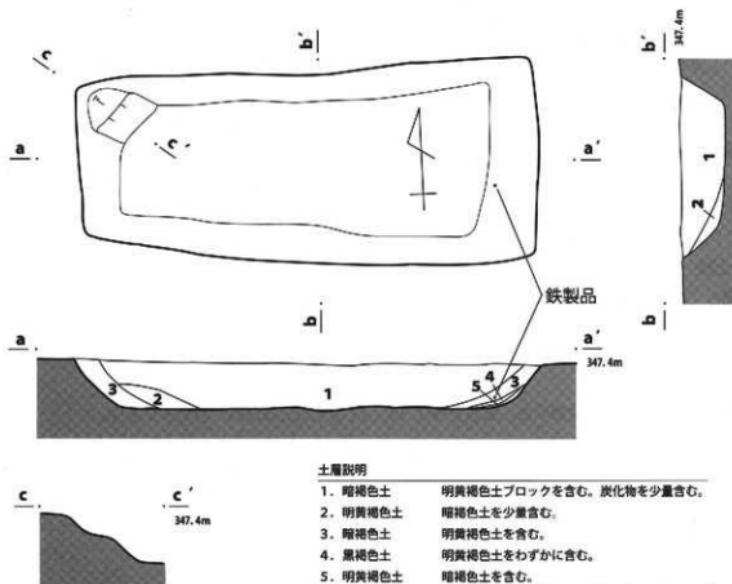
形状／規模 東西3間、南北は2間以上である。

土坑 直径25～40cm前後の土坑からなる。

出土遺物 鉄製の鎌が1点出土した。ほぼ完形である。長さ137mm、幅36mm、厚さ4mm、重さ38.83gである。



1号墓墳平・断面図



1号竪穴状遺構平・断面図

第9図 1号墓墳平・断面図、1号竪穴状遺構平・断面図 (1/40)

(4) 柱穴列

土坑の中で、比較的土坑の規模が小さく同一直線上に並ぶ遺構を柱穴列として報告する。

1号柱穴列（第10・11図、第1表、写真図版1）

位置 調査区東側に位置し、東西に走る。2号柱穴列とほぼ並行する。

形状／規模 直径約20cmの小土坑（1～15号土坑）がほぼ一列に並ぶ。土坑の深さは約20～30cmでほぼ一定している。その中で4・11号土坑は東側が一段深く掘られている。東側は調査区外まで延びていると予想されるが、西側は15号土坑より以西には見られない。

2号柱穴列（第10・11図、第1表、写真図版1）

位置 調査区東側に位置し、東西に走る。1号柱穴列とほぼ並行する。

形状／規模 直径約20cmの小土坑（16・17・27～33号土坑）がほぼ一列に並ぶ。土坑の深さは約10～20cmでほぼ一定している。1号柱穴列と同様に東側は調査区外まで延びていると予想されるが、西側は33号土坑以西には見られない。

3号柱穴列（第10図、第1表、写真図版1）

位置 調査区東側に位置する。1、2号柱穴列より軸がやや南へずれる。

形状／規模 14号土坑と44号土坑、42号土坑が1列に並ぶ。1、2号柱穴列の土坑と比べ、規模がやや大きい。

備考 1、2号柱穴列とは柱穴の数、軸、規模など基本的な構造が異なる。調査区外の北側に柱穴があれば、掘立柱建物となる可能性がある。

(5) 土坑（第10・12・13図、第1・2表、写真図版1・2・3）

調査区東側に集中する。本報告書では上坑とピットの区別は行わず、小型の穴も一括して上坑と呼称する。掘立柱建物および柱穴列以外の土坑の特徴として、規模が大きく、底面がやや平坦である点が挙げられる。なお、土坑の詳細については第1・2表土坑計測表を参照されたい。

40号土坑

位置 調査区東端に位置する。東西を軸に41～43号土坑とほぼ一直線上に並ぶ。

形状／底面 大小二つの土坑が重複しているため不整形の形状となっている。底面はほぼ平坦であるが、西側の小土坑は丸底となる。

41・42号土坑

位置 調査区東端に位置する。東西を軸に40、43号土坑とほぼ同一直線上に並ぶ。

形状／底面 二つの円形の土坑が重複している。42号土坑は3号柱穴列の西端である。底面は双方ともに皿状を呈する。

43号土坑

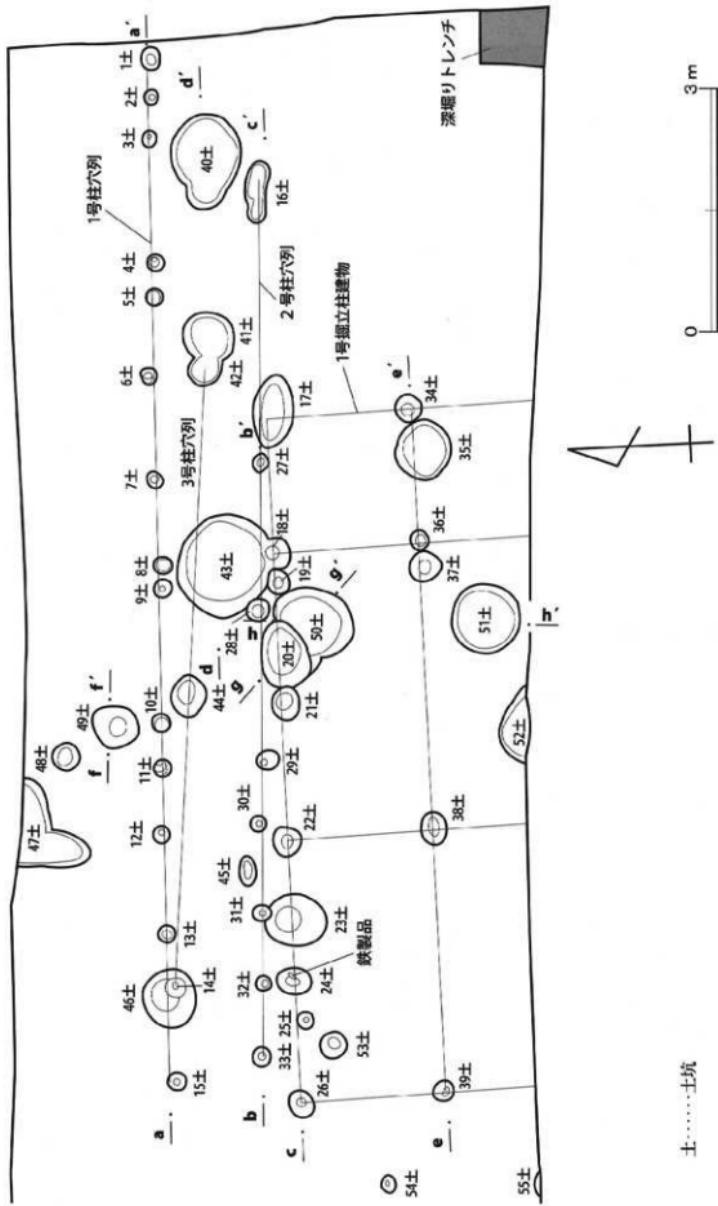
位置 調査区東に位置する。東西を軸に40～42号土坑とほぼ東西の同一直線上に並ぶ。

形状／底面 円形を呈する。底面はほぼ平坦な形状である。

備考 40～43号土坑は、規模は異なるが東西のほぼ同一直線上に並び、1号柱穴列と並行する。各土坑の底面標高もほぼ同一レベルである。

44号土坑

第10図 土坑群平面図 (1/60)



第1表 土坑計測表

番号	形状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	底面標高(cm)	備考
1	円形	28	23	40.5	346.707	
2	円形	20	17	10.0	347.012	
3	円形	20	18	15.0	346.947	
4	円形	21	19	16.0	346.927	
5	円形	21	20	18.5	346.907	
6	円形	21	19	16.0	347.002	
7	円形	22	18	13.5	347.062	
8	円形	22	21	33.0	346.927	
9	円形	23	20	30.0	346.967	
10	円形	25	22	27.5	347.022	
11	円形	22	20	25.5	347.037	
12	円形	21	20	19.5	347.087	
13	円形	28	21	20.5	347.069	
14	円形	26	26	9.5	347.107	
15	円形	23	20	17.0	347.112	
16	不整形	76	26	11.0	346.962	二つのピットの複合
17	楕円形	90	50	9.0	347.032	
18	円形	—	19	21.0	347.017	ピット43との複合
19	円形	33	27	19.0	347.052	
20	不整形	85	60	17.5	347.092	ピット50との複合
21	円形	49	33	22.5	347.057	
22	円形	46	44	13.5	347.147	
23	円形	74	55	13.0	347.147	
24	楕円形	42	32	17.0	347.117	
25	円形	22	21	7.0	347.207	
26	円形	34	29	15.0	347.137	
27	円形	23	18	6.0	347.097	
28	円形	30	25	13.0	347.117	
29	円形	29	24	19.5	347.087	
30	円形	20	20	10.5	347.172	
31	円形	21	19	10.0	347.167	
32	円形	19	18	9.0	347.192	
33	円形	23	21	12.5	347.152	
34	円形	33	32	14.5	346.982	
35	円形	74	70	5.5	347.102	
36	円形	24	22	14.0	347.058	
37	円形	39	38	15.0	347.067	
38	円形	39	31	14.0	347.132	
39	円形	26	25	12.0	347.175	
40	不整形	118	87	10.0	346.992	二つのピットの複合
41	円形	57	68	7.5	347.027	ピット42との複合
42	円形	39	46	5.5	347.072	ピット41との複合
43	円形	132	115	15.0	347.107	ピット18との複合
44	楕円形	53	42	7.5	347.022	
45	楕円形	36	20	7.0	347.207	

第2表 土坑計測表

番号	形状	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面積 (m ²)	備考
46	円形	74	68	9.5	347.187	
47	不整形	—	—	14.0	347.142	
48	円形	35	34	9.5	347.207	
49	円形	58	52	22.0	347.087	
50	楕円形	—	—	10.5	347.147	ピット 20 との複合
51	円形	88	84	7.0	347.182	
52	—	—	—	6.5	347.182	
53	円形	34	31	7.0	347.202	
54	円形	20	18	6.5	347.242	
55	—	—	—	2.0	347.302	
56	円形	28	22	3.5	347.414	
57	円形	31	27	5.0	347.414	

位置 43 号土坑の西側に位置する。

形状／底面 楕円形を呈する。底面は丸底である。

45 号土坑

位置 31 号上坑と 30 号上坑の中間や北側に位置する。

形状／底面 楕円形を呈する。底面は丸底である。

46 号土坑

位置 1 号柱穴列直線上の西端に位置し、13 号上坑と 15 号土坑の間にある。

形状／底面 円形で底面は皿状を呈する。東側は 14 号土坑が重複し、一部丸底となっている。

47 号土坑

位置 調査区東側の北壁際、48 号土坑の西側に位置する。

形状／底面 不整形を呈す。複数の土坑が重複していると考えられる。底面はほぼ平坦である。

48 号土坑

位置 調査区東側の北壁際、47 号上坑の東に位置する。

形状／底面 円形を呈する。底面は丸底である。

49 号土坑（第 12 図）

位置 48 号土坑の南側に位置する。

形状／底面 ほぼ円形を呈する。底面は丸底である。

20・50 号土坑（第 12 図）

位置 19 号上坑と 21 号上坑の間に位置する。

形状／底面 50 号土坑の西側を 20 号土坑が壊しているため正確な形状は不明であるが、両者とも楕円形状を呈する。底面はほぼ平坦で、20 号土坑の方がやや深い。

51 号土坑（第 12 図）

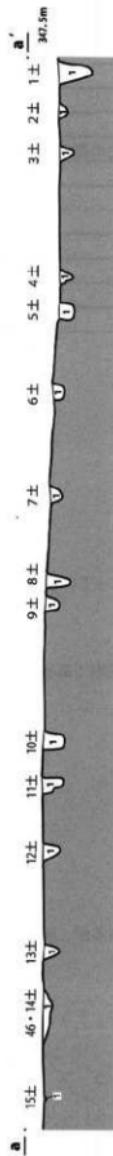
位置 調査区東側の南壁際、52 号土坑の東に位置する。

形状／底面 円形を呈する。底面はほぼ平坦である。

52 号土坑

位置 調査区東側の南壁際、51 号土坑の西に位置する。

形状／底面 調査区外へ続いているため形状は不明である。確認した部分での底面は平坦である。



1号柱穴(46号土坑を除く)



2号柱穴(43号土坑を除く)



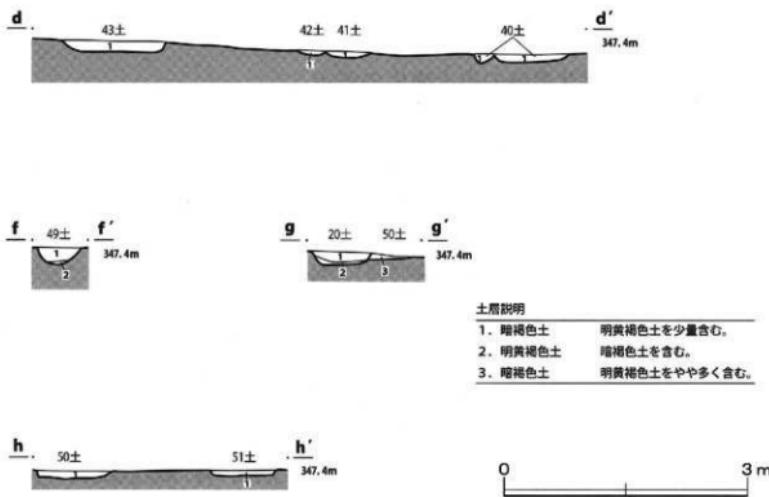
1号柱立柱物 (16・19・20・23・30号土坑を除く)



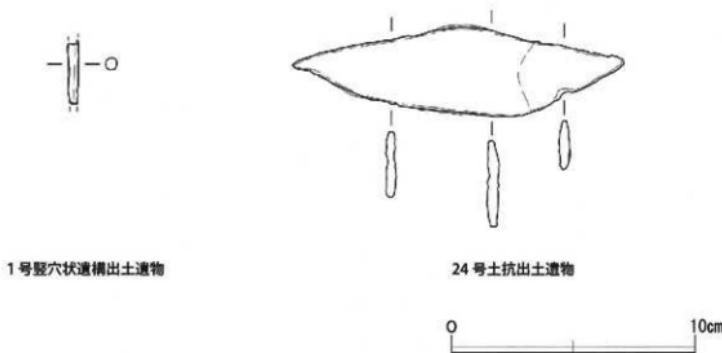
1号柱立柱物



第11図 柱穴列断面図 (1/60)



第12図 土坑断面図 (1/60)



第13図 1号竖穴状遺構・24号土坑出土遺物 (1/2)

第IV章 自然科学分析

第1節 六科・村北遺跡の出土歯片の鑑定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

山梨県中巨摩郡八田村に所在する六科・村北遺跡は、御勅使川扇状地の扇尖北端に位置している。発掘調査では、土坑や墓壙が検出され、人骨と考えられる骨片や歯牙片などが認められている。

本報告では、1号墓壙から出土した人の歯片について鑑定を行い、部位や年齢などに関する資料を作成する。なお、鑑定にあたっては金子浩昌氏の協力を得ている。

1. 試料 (写真図版3)

試料は、六科・村北遺跡の発掘調査区西端から検出された長軸約1.5m×短軸1.1mを測る方形の上坑墓（1号墓壙）から出土した歯牙片である。歯牙片は、土坑の北西隅に近い場所に集中して出土しており、土壤ごと一括で取りあげられた。これら、一括取り上げを行った土壤の洗い出しを行った結果、歯牙片が25点抽出された。今回は、この抽出された歯牙片全点を対象に鑑定を行う。

2. 分析

試料の接合・復元は工作接着剤を用いて行う。鑑定は、標本と比較して種・部位を特定し、計測にはデジタルノギスを用いる。

3. 結果および考察

鑑定結果および計測値を表1に示す。抽出された25点の歯牙片は、いずれもヒトのものであった。歯冠のエナメル質のみが保存され、歯根は失われている。抽出された歯牙片には被熱の痕跡が認められないことから、火葬骨でないと考えられる。鑑定によって部位等を明らかにできた歯牙片は10点であり、特に保存状態の良好な3点について計測を行った。

歯牙の観察・計測の結果、女性の平均計測値よりやや小さく被葬者は女性と推定され、臼歯咬耗度の状況から壯年（35歳位か？）と考えられる。

表1 1号墓壙 出土歯牙同定・計測結果

分類群	左右	部位 ¹	点数	備考	計測値 (mm) ²	現代日本人 (計測値) ³	
						男性	女性
ヒト	左	LP ₁	1	一部欠損	-		
ヒト	右	RP ^c	1	破損するかほぼ完形	-		
ヒト	右	RM ₂	1	一部欠損	-		
ヒト	右	RM ₁	1	ほぼ完形	10.80, 暗10.09	11.2	10.9×10.8
ヒト	左	LM ₃	1	ほぼ完形	8.89, 暗8.69	10.2	9.5×9.6
ヒト	右	RP ^d	1	一部欠損	-		
ヒト	右	RP ^e	1	一部欠損	-		
ヒト	右	RP ₂	1	ほぼ完形	-		
ヒト	右	RI ^f	1	ほぼ完形	7.79, 暗7.12	8.5	8.2×8.1
ヒト	左	LI ₂	1	ほぼ完形	-		
ヒト	-	切歯片	3	破片のみ	-		
ヒト	-	臼歯片	12	破片のみ	-		

*1: I---切歯、P---小白歯(前臼歯)、M---大臼歯(後臼歯)

*2: 無印---近位間長、遠位間長、唇---脣舌間長

*3: 柴田(1941)を参照

引用文献

柴田 信 (1941)「歯牙形態学」, p337. 金原商店.

第V章 調査の成果と課題

本調査によって、墓壙1基、竪穴状遺構1基、掘立柱建物1基、柱穴列3列、そのほか多数の土坑が発見された。本章では主な遺構ごとに時期や構造、機能等を検討しまとめたい。

第1節 遺構について

(1) 墓壙

時期については、副葬品がみつからなかつたため不明である。しかしながら、形状および埋葬形態のよく似た墓壙の類例を、近隣の遺跡からあげることができる。

本遺跡から北東へ約900mの地点に位置する石橋北屋敷遺跡では、16世紀後半に比定される墓壙が10基発見されている。^(注1) だがこの数は、人骨が遺存し墓壙と報告されている遺構のみの数であり、人骨が遺存しなかつた上坑まで含めると、遺跡全体での墓壙は相当数に上ると推測される。墓壙の形態は隅丸長方形あるいは不整円形プランを呈し、埋葬形態は北頭側臥の屈葬が多い。また、石橋北屋敷遺跡の南東に位置する野牛島・大塚遺跡第2地点でも隅丸長方形で北頭側臥東向きの屈葬の墓壙が1基発見されている。野代幸和氏は山梨県のこうした中世墓制を研究し、その形態から墓制の変遷過程を提示している。^(注2) その研究結果によれば、隅丸長方形プランをとる墓壙は第Ⅱ期15世紀～17世紀に多く、特に16世紀後半から17世紀にかけては西向きが多い傾向にあるという。以上の点から考えると1号墓壙は第Ⅱ期特に16世紀後半の特徴を示している。

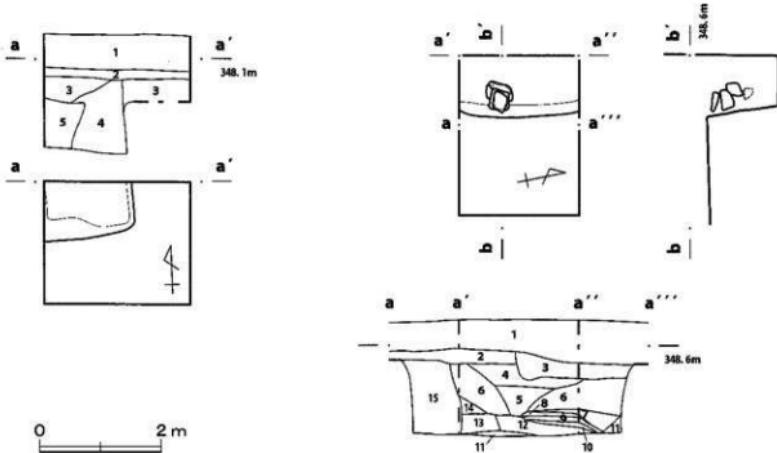
(2) 竪穴状遺構

出土遺物が棒状の鉄製品1点のため、正確な時期は不明である。しかし、覆土の均質性や遺構の配置をみると1号竪穴状遺構の東側に広がる1号掘立柱建物や柱穴列、上坑と大きな時期差はないと推測される。

時期と同様に機能についても特定はできない。しかし、1号竪穴状遺構の類例が、本遺跡の西側に隣接する六科・村北遺跡第2地点（以下第2地点と記す）で3基発見されている。試掘調査（1次調査）で1基確認し、浄化槽部分の調査（2次調査）で第1トレンチと第6トレンチでそれぞれ1基づく、計2基を確認後、その2基の発掘調査を行った。2基ともにトレンチ外に延びているため平面形の全体像は不明であるが、検出部分から考えると隅丸長方形を呈すると推測される（第14・15図）。底部形態は側壁がほぼ垂直に立ち上がる形態をとる。遺構の形状から1号竪穴状遺構と比較した場合、平面形はほぼ同じであるが、船底型を呈する1号竪穴状遺構とは底部形態が異なる。また、確認面からの深さは1号竪穴状遺構が約40cmであるのに対し、第2地点の竪穴状遺構は約90、120cmで両者に大きな差がみられる。兩遺跡の堆積状況は大きく異なつてないため、このような底部形態と深さの違いは、機能あるいは時期差によるものと思われる。^(注3)

(3) 掘立柱建物

1号掘立柱建物では、遺物が検出されなかつたため時期は不明である。また、調査区外へ延びているため、その形状も正確には把握できない。しかし、柱穴の配置からある程度の時期が推測できる。室伏徹氏は、柱穴の配置状況から山梨県内の中世の掘立柱建物を建築様式によって分類し、建築技術の發展



第14図 六科・村北遺跡第2地点2次調査
第1トレンチ竪穴状遺構平・断面図 (1/80)

第15図 六科・村北遺跡第2地点2次調査
第6トレンチ竪穴状遺構平・断面図 (1/80)

過程と年代が特定できる資料を考慮して掘立柱建物の編年を試みている。その案によれば、1号掘立柱建物は16世紀後半期、時期区分では9期前半に該当する。9期前半の特徴は、建物内部に居住区分柱が現れ、1棟の建物に3尺から8尺までの複雑な尺度が利用されるというものである。こうした掘立柱建物の事例として塩川B遺跡、勝沼氏館跡3B期が挙げられている。六科・村北遺跡の1号掘立柱建物は、建物内にいくつかの尺度が用いられており、全体像は不明ながらも9期前半に位置づけられる可能性がある。

(4) 柱穴列

検出された柱穴列は、直径20cm前後の小型の土坑で構成されている。樋あるいは堀跡であると考えられる。この1、2号柱穴列と1号竪穴状遺構および1号掘立柱建物の東西軸は、現在の地割の軸とほぼ一致する。つまり調査区東側を南北に走る道路とほぼ直角に、堀や建物が配置されているのである。現在の地割が中世まで遡るかは不明であるが、南北に走る道沿いに、堀で区画された建物が並んでいた可能性がある。

なお、1号柱穴列と2号柱穴列および1号竪穴状遺構の同時性、新旧関係は不明であるが、遺構の配置、覆土の同質性を考えると大幅な時期差はないと推測される。

第2節 まとめと課題

以上、本調査によって発見された遺構について若干の所見を述べた。調査区が狭く、出土遺物が少ないため、いずれの遺構についても時期、機能の特定は難しい。しかし、墓壙や掘立柱建物の形状から、本遺跡はおむね 16 世紀代の遺跡と推測される。

遺構の配置をみると、湖で区画された建物が調査区東側を南北に走る古道にそって建てられており、調査区外の古道沿いにも同様の建物がいわゆる「うなぎの寝床」状に並んでいた可能性がある。現在、調査区周辺は畠となっているが、16 世紀後半には少なくともこの地点まで集落が広がっていたと言えよう。また 1 号墓壙や六科・村北遺跡第 2 地点の竪穴状遺構を墓壙と考えると、調査区西側から六科・村北遺跡第 2 地点付近は、16 世紀代墓域であった可能性がある。

遺跡が営まれたと推測される 16 世紀代、旧六科郷に関わる文書記録がいくつか残されている。元龜 2 年（1571）の武田家印判状には、武田家が六科郷の矢崎源右衛門に参陣を命じる内容が記されている。^(註 1) また、天正 10 年（1582）8 月 17 日の徳川家印判状には、武川衆の折井左衛門次昌が本領のかわりとして「六科山下分」十貫文を含む計 133 貫 400 文の所領を徳川氏から安堵されたことが書かれている。^(註 2)

今回発掘された資料は、こうした文書記録の情報を補完し、人々の生活の痕跡を具体的に示すものである。遺跡の時期や変遷、機能など解明すべき課題は多いが、本調査結果によって六科地区において江戸時代以前の集落が初めて考古学的に確認された意義は大きいといえる。今後は調査事例を積み重ね、遺跡の位置づけを再度検討し、より厚みのある地域の歴史を構築していくことが必要であろう。

本書を執筆するにあたり室伏徹氏には資料提供や貴重なご助言をいただいた。未筆ながら、お礼を申し上げまとめとしたい。

(註 1) 小林他 2000

(註 2) 野代 2000

(註 3) 勝沼町の勝沼氏館跡では、掘立柱建物を伴う工房跡で竪穴状遺構が検出されている。勝沼氏館跡を調査した室伏氏によれば、勝沼氏館跡の場合、底部形態が船底型の竪穴状遺構は金属製品の廃棄場所であり、急に立ち上がる竪穴状遺構は木製品の廃棄場所として利用されているという（室伏 1999）。館跡と本遺跡は規模や性格が異なるため単純な比較はできないが、竪穴状遺構の役割として木製品等の「廃棄場所」にも注目したい。

(註 4) 室伏 2003

(註 5) 六科・村北遺跡第 2 地点の第 6 トレーナーで発見された竪穴状遺構には、幅約 30cm 前後の平石が、覆土上層から 4 個上下に重なって出土した。脆弱な造りで、階段とするには構造上無理がある。覆土上層に石を配す類似例として高根町旭東久保遺跡の第 1 号土坑がある。隅丸長方形プランに北頭側臥東向きの埋葬形態の 1 号土坑には覆土上層に墓標状に環が配置されており、六科・村北遺跡第 2 地点の竪穴状遺構と構造がよく似ている。こうした墓壙は、三珠町上野遺跡 14・15 号土坑（15 世紀）や白州町教米石民部館跡、高根町持井遺跡第 11 号土坑等で発見されている。こうした例から推測すると、六科・村北遺跡第 2 地点の竪穴状遺構は、墓壙である可能性がある。

(註 6) 室伏 2002

(註 7) 萩野他 1968 柳本存雄家文書／新編甲州古文書 第 2 卷

(註 8) 萩野他 1968 武川衆所蔵文書／新編甲州古文書 第 2 卷

引用・参考文献

- 磯貝正義他 1995 『山梨県の地名』 平凡社
- 荻野三七彦他 1968 『新編甲州古文書』 第2巻 角川書店
- 東北中世考古学編 2001 『掘立と竪穴—中世遺構論の課題—』 高志書院
- 室伏 徹 1996 『史跡勝沼氏館跡—平成4~7年度外郭城G地区発掘調査概報—』 勝沼町教育委員会
- 1999 『史跡勝沼氏館跡外郭域発掘調査の成果』『武田氏研究』第20号
- 2000 『第3節 掘立柱建物について』『深山田遺跡』 明野村教育委員会他
- 2002 『勝沼氏館跡』『武田系城郭研究の最前線』 山梨県考古学協会
- 2002 『山梨県の中世掘立柱建物』『山梨考古』第86号 山梨県考古学協会
- 小林健二他 2000 『石橋北屋敷遺跡』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第178集 山梨県教育委員会他
- 斎藤秀樹 2003 『平成13・14年度埋蔵文化財試掘報告書』 八田村文化財調査報告書 第6集 八田村教育委員会
- 高根町教育委員会 1985 『旭東久保遺跡』
- 1992 『持井遺跡』
- 中巨摩郡文化協会郷土研究部 1988 『中巨摩郡地名誌』 中巨摩郡文化協会連絡協議会
- 長坂町教育委員会 1985 『小和出館跡 発掘調査概報』
- 新津 健 1997 『大塚遺跡』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第137集 山梨県教育委員会他
- 野代幸和 2000 『山梨県における中近世墓制の変遷』『山梨県考古学協会誌』第11号 山梨県考古学協会
- 白州町教育委員会 1989 『教来右民部館跡』
- 八田村誌編集委員会 1972 『八田村誌』 八田村
- 三珠町教育委員会 1989 『上野遺跡』
- 森 和敏他 1992 『青木北遺跡・梅の木遺跡』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第66集 山梨県教育委員会他

写 真 図 版



S = 1/10,000

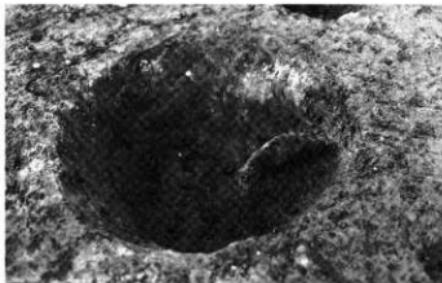
写真図版 1



写真図版 2



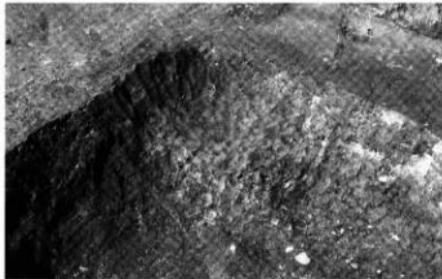
1. 40～43号土坑他（西から）



2. 24号土坑鉄製品出土状況

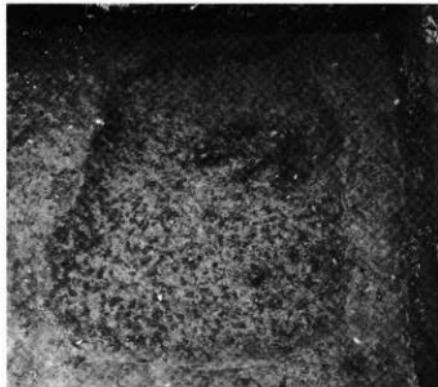


3. 1号竪穴状遺構（東から）

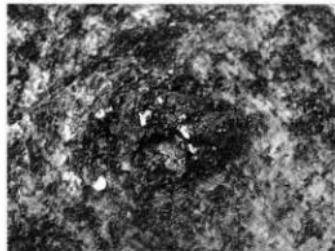


4. 1号竪穴状遺構北西隅ステップ

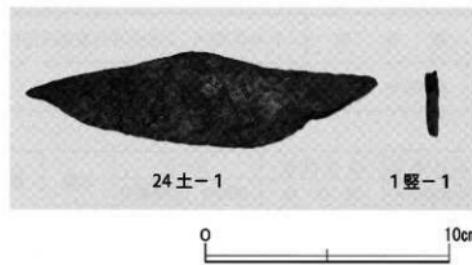
写真図版 3



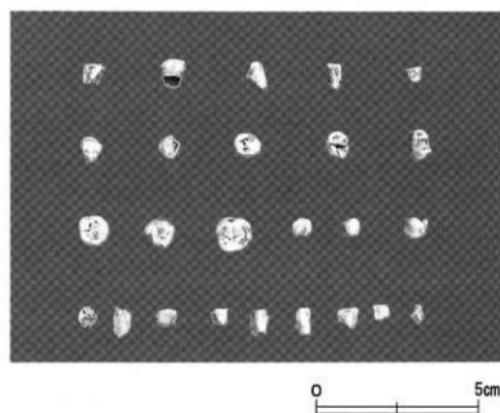
1. 1号墓壙（北から）



2. 1号墓壙齒出土状況



3. 1号竪穴状遺構および
24号土坑出土鉄製品



4. 1号墓壙出土歯牙

報告書妙録

ふりがな	むじな・むらきたいせき
書名	六科・村北遺跡
副書名	宅地分譲住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	八田村文化財調査報告書
シリーズ番号	第7集
編著者名	斎藤秀樹
編著機関	八田村教育委員会 中央土地建設株式会社
所在地	〒400-0204 山梨県中巨摩郡八田村樅原 800
発行年月日	2003年3月27日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
六科・村北 遺跡	山梨県中巨摩郡 八田村六科	19384	6	35度 39分 43秒	138度 28分 13秒	20010219～ 20010227	87	宅地分譲住 宅建設工事 に伴う発掘 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
六科・村北 遺跡	集落址	中世	墓塚 竪穴状遺構 掘立柱建物 柱穴列 土坑	1 1 1 3 57	鉄製鎌

八田村文化財調査報告書 第7集

山梨県中巨摩郡八田村

六科・村北遺跡

宅地分譲住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行日 2003年3月27日

編集／発行 八田村教育委員会

〒 400-0204 山梨県中巨摩郡八田村権原 800

T E L 055-285-1883

F A X 055-285-0491

印 刷 所 鬼灯書籍株式会社

〒 381-0012 長野県長野市柳原 2133-5

T E L 026-244-0235

F A X 026-244-0210

